

## 令和5年度秋田県総合政策審議会第3回教育・人づくり部会議事録

1 日 時 令和5年8月31日（金）午後1時30分～2時30分

2 場 所 県議会棟 大会議室

3 出席者

- 委員 佐藤 学（秋田大学大学院教育学研究科教授）  
豊田 哲也（国際教養大学中嶋記念図書館長・教授）  
廣田 千明（秋田県立大学システム科学技術学部准教授）

※ 【欠席】野崎 一（秋田県PTA連合会事務局長）

- 県 和田 渉（秋田県教育庁教育次長）  
高島 知行（秋田県教育庁総務課長） ほか関係課室長等

### 1 開 会

### 2 議 事

◎豊田部会長

次第に沿って進める前に一言申し添えるが、審議内容は議事録としてウェブサイトに掲載される。その際、委員名は特に秘匿する必要はないと思うので公開にしたいが、よろしいか。

#### (1) これまでの教育・人づくり部会における主な意見等について

#### (2) 提言（素案）について

◎豊田部会長

初めに、議事（1）「これまでの教育・人づくり部会における主な意見等について」及び議事（2）「提言（素案）について」事務局から説明をお願いします。

●教育庁総務課 伊藤副主幹

部会資料－1、部会資料－2により説明

◎豊田部会長

ただ今の説明について何か質問等はあるか。特になければ、提言の1から5まで一つ一つ丁寧に聞いて、本部会としての提言書をまとめていきたい。

## 【提言1】秋田の将来を支える高い志にあふれる人材の育成について

(特になし)

## 【提言2】確かな学力の育成について

### ○佐藤委員

「確かな学力の育成」に関して、確認したい。ICTの教育導入は、探究に前向きな学習者にとっては、学びの手は止まらないことになる。しかし、理解が遅れがちな児童生徒、ICTを使いこなすことができていない児童生徒も、「学べなくていい」「ICTを使えなくていい」と思っているわけではない。探究的学習に応じること、訓練型学習に応じることの違いの場合でも、児童生徒の学びを支援するという立場では、教師は、学びをコントロールするのではなく、児童生徒が自分にとって必要な学びを選択し取り組んでいけるように支援の立場にシフトしていくよう、大きく転換していかなければならない。

本県において探究型授業を推進してきた方が、「(ここ数年の社会の変化を踏まえると)授業の捉え方が変わりました。以前の私の授業イメージは Society3.0 時代のものだったと自省しております」(あきた数学教育学会誌、2023、p.1)と述べられているように、「秋田の探究型授業」を見直す時期にきている。その意味では、具体的な方策の文中に「新たな秋田の探究型授業」と書いているのは、とてもインパクトがあると思う。まだ十分でない「問題発見」「新たな発展」「探究」という点にも取り組んでいけるよう、強いメッセージを出していくべきである。提言のタイトルが「更なる改善」では弱い。これまでと同じ学習形態を踏襲することに留まりかねないので、思い切ってこの「新たな」という言葉が前面に出るように、書き加えていただくことをお願いしたい。

### ◎豊田部会長

私も具体的な方策に「新たな」という言葉が入っている一方で、提言の項目が「更なる」のままなのはどうかかなと思っていた。佐藤委員からの御提案のとおり「新たな」にして、文言調整する感じでどうだろうか。

提言の項目としては、「ICTを効果的に活用し、児童を主体とする新たな探究型授業を開発すること」といった感じになるだろうか。細かい文言については実際に書いてみないと分からないが、そうした形で修正を行うということではよろしいか。

### ○廣田委員

佐藤委員が学びを止めないでやっていくことが大事だということをおっしゃったので、関連して思ったことを発言させていただきたい。

今、また新型コロナウイルス感染症が広がってきて学級閉鎖等が増えている。そうした状況にあって、子どもたちの学びが止まることなくきちんと実施できているのか、少し不安に思っている。今後、コロナ禍や先日の水害のようなトラブルがあった際に、それに負けずに学びを続けていける強い仕組みが必要である。それはおそらくICTを活用することになるのだと思うが、そういった強い教育のシステムを構築していくといったような目標が入っているといいと思う。そういったシステムを早く構築しないと、何かトラブルがあるたびに学びが止まってしまい、良くないと思う。

◎豊田部会長

今の御指摘について、ここを直したらいいというのはすぐに頭に浮かばないが、廣田委員のおっしゃることは私も感じていて、コロナ禍は、学校における学びの本質とは何だろうということを深く考えるいい機会だったと思う。秋田が他の都道府県と比べて、探究型授業に早くから取り組んでいて、学びというのは、先生の言うことを覚える作業ではなくて、子どもたち自身が自分の手を動かして自分の頭を動かして学び取っていくものだということが非常に定着していたので、コロナ禍の2年間も学びを止めることなく、しっかりと前に進んできていたと思う。そのことを再確認する意味でも、また更にグレードアップしていったら、佐藤委員からも御指摘いただいたように、「新たな秋田の探究型授業」に発展させていくために、学びの本質について改めて教育関係者の間で共有していかなければならないということもどこかに入ってもいいのかもしれない。提案の背景に少し入れるぐらいになるだろうか。あまり黒ポツを増やすことはしたくないが、今、廣田委員がおっしゃったことは、提言の背景の最初に加えてもいいのかもしれない。「本県ではこれまでも探究型事業の推進として、学びにおける児童の主体的な参加を重視してきたが、これまで以上に重要になる」といった形で、先ほどの佐藤委員のお話につなげるという感じになるが、よろしいか。

○佐藤委員

教育というのは、レジリエンスというものも学んで、身に付けている。この社会的な価値の創造の後に、あらゆる困難に打ち勝つレジリエンス・強靱さを身に付けていくことも重要だといった文言を加えていただきたい。

◎豊田部会長

そうすると、提言1の背景のAIやIoTのことが書かれてる段落のところに、教育のレジリエンスが試されてる時代だという点を入れる感じだろうか。

○佐藤委員

補足すると、コロナ禍や自然災害等も取り上げる必要がある。

◎豊田部会長

そうすると、「2年間のコロナ禍は、教育の本質が、児童の主体的な学習能力の獲得にこそあることを確認させるものであった」のような感じだろうか。

具体的な文言については後でまた今後検討することとして、この提言1の背景の一つ目の黒ポツの後に追加する方向で検討したい。

●教育庁総務課 伊藤副主幹

加えて、提言2の背景が今三つあるが、そこにもう一つポツを加えて、新たな秋田の探究型授業に関連するような形で、三人の委員の御意見を踏まえ、追記できないか検討していきたいと思う。

◎豊田部会長

議事録を作って、更に二人の委員の発言も精査して、できるだけ文言を取り入れるようにしたいので、そこは御一任いただくということでよろしいか。

### 【提言3】グローバル社会で活躍できる人材の育成について

○佐藤委員

今回の検討事項ではないが、国際交流について意見を述べておきたい。オンラインによる国際交流の促進というのは、学校単位となると先方との調整は難しく、結局はなかなか進まないということにもなる。そこで、インフルエンサー等と生徒たちが交流するということは、観光とも相まって効果的であると考えます。観光文化スポーツ部と連携して、人材バンクを作って交流活動を行うのは、取り組みやすいのではないかと。

◎豊田部会長

オンラインの話なので、結構簡単に出来るのではないかと思います。高島課長はその分野の知見がありそうだが、どうしたらいいだろうか。

●高島教育庁総務課長

オンラインを使えば色々な可能性があると思うので、そういった中で、どういう交流ができるのか検討していきたいと思う

ただし、インフルエンサーの場合は、お金も絡んでくる部分も出てくるかと思う。無償でやってくれるインフルエンサーもいるだろうが、何かしらのアクションに対して対価が求められることも多いと思う。そうしたことも踏まえながら可能性を探っていきたい。

◎豊田部会長

提言の中身とは関係ないが、教育庁の中で担当を振って企画を立てろというのは、今年度急に実施することは難しいだろうか。

●藤澤高校教育課長

当課に英語教育推進チームがある。前回もお話したが、県内の能代松陽高校、秋田南高校、角館高校、由利高校の4校において、オンライングローバルラーニングプロジェクト事業の中で外国とオンラインで交流しており、こうした取組を県内に広めていきたいと考えている。

◎豊田部会長

教育庁の中で既に色々取り組んでおられることがあるので、それを広めていくという方法もある。また、民間企業等でも、学生を対象とした無償のオンラインイベントの開催などにより、本県の教育にも非常にプラスの効果を及ぼすと思う。もちろん教育庁でやらなければならないことはやっていくが、全て県庁任せではなく、秋田県全体として、民間部門においても国際交流の気運を盛り上げていくような動きがあればよい。

これは提言書の内容と関係ないが、提言書の中に書いてあることを実施していくために、教育庁の中でも考えていかなければならないし、教育庁の外にいる我々も考えていかなければならない。

○廣田委員

海外とのオンライン交流はリアルタイムのものを想定しているため、時差もあるので、時間調整が大変になる。別にメールでもいいし、ビデオメッセージをYouTubeに挙げて、それにメッセージを返すのでもよい。そういうやり方もどこかで考案していく必要があるのではないか。

◎豊田部会長

年30万円ぐらいの委託事業として検討いただければ、国際教養大で学生をアルバイトで雇用してプロジェクトチーム立ち上げることもあるかもしれないので、検討いただきたい。

**【提言4】豊かな心と健やかな体の育成について**

◎豊田部会長

今、学校の先生は、ICT時代に対応して教育をグレードアップ、バージョンアップし、秋田の探究型授業を新しいものに変えていくために、非常に忙しい。学校の本来の役割は授業をすることであり、先生方が授業改善のために研究に集中できる体制づくりをぜひお願いしたい。そのために非常に重要なことの 하나가部活動の地域移行であるということを改

めて強調しておきたい。

○廣田委員

今の子どもたちの体力は落ちてきている。スポーツするときだけ体力が要るわけではなく、勉強するときにもすごい体力を必要とするので、体力が落ちていくという状況は良くないと思う。そういう観点で見ても、体育の授業や体育的行事を一層充実させていくことは今後も大事なことになるのではないかと考えている。この取組がうまくいって、子どもたちの体力が向上していくとよい。

◎豊田部会長

今のコメントに追加するが、もちろん生涯を通じてスポーツをされる健康な方もいるが、多くの県民は、小・中・高が終わるとスポーツをしない。バスケットボールやバレーボールをする最後の経験になる。小・中・高でどういうスポーツ教育をするかということは、子どもの健康の話だけではなく、今後の50年、100年にわたる県民の健康の問題においても極めて重要である。それはオンラインではできないことであり、学校の一つの機能として健康教育ということでも非常に重要であることから、提言書の内容に関わりがないが、改めて強調しておきたい。

### 【提言5】生涯にわたり学び続けられる環境の構築について

○佐藤委員

リカレント教育について、シニアのニーズを把握していく必要がある。

高等教育を経験した者がいる家庭では高等教育の進学率が高いが、高等教育を経験していない家庭では進学が少ないというデータ<sup>1</sup>がある（平沢、2012）。また、先日、学生から、大学の学修について家族から理解が得られず困っているという相談を受けたことがある。

大学に進学する・しないにかかわらず、高等教育では新しい知に触れられることを、広く県民に周知していく工夫が必要である。

これに対しては、県内3大学が、これまでと同じように18歳人口を対象にした高等教育を展開するだけでなく、高齢者や自己研鑽、キャリアアップに応えられるよう、大学からの知識の提供を変えていく必要がある。これは新たな枠組みを作ることにもなるので、3大

---

<sup>1</sup> 例えば、内閣府の平成23年度「親と子の生活意識に関する調査」では、両親学歴が、子どもの大学志望に有意な直接効果があることが報告されている（平沢和司（2012）、「4.子どもの理想学歴と家庭環境」, 内閣府『平成23年度「親と子の生活意識に関する調査」』, pp.129-130. [https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/life/h23/pdf\\_index.html](https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/life/h23/pdf_index.html) (2023.9.6最終確認))。

学だけではなく、文部科学省とも議論していく必要がある。秋田県としても、高等教育機関に要望と働きかけをしていく必要がある

まずその一歩として、リカレント・リスキリングについてどのようなニーズがあるのか、県が実態を把握することは始めてもよいのではないか。

◎豊田部会長

提言書を修正する必要はないと思うが、今の御発言を議事録に残し、また、今日の御出席の皆さんの心に留めていただくということにしたい。

○廣田委員

佐藤委員の意見に同感で、ここの項目は、高等教育機関に対する宿題だろうなと思っている。提言書でリカレント講座を充実させていくということが挙げられているが、何をやらいいのかわ自分たちも分かっていない状況にある。どの世代がどういうリスキリングやリカレントの講座を望んでいるのか、ニーズが分かると、それを踏まえて、来年度こういう講座を提供できるとか、場合によっては、県内高等教育機関で連携して講座提供するということもできるかもしれない。今のやり方では、各機関が県民のニーズとは別に、自分の提供できるものを出していて、それでは空振りになってしまう可能性もある。ニーズ調査がそんな簡単にできるかどうかは分からないが、やってもらい、その情報が高等教育機関に来てくれると作戦が立てられる。

◎豊田部会長

高等教育支援室の仕事を増やすことになるが、10ページの具体的な方策の1の二つ目の黒丸に「産業部門と連携し、リカレント・リスキリング講座の情報収集・集約化を図り、県民に対し情報発信を行うべきである。」とあるが、そこに「県内高等教育機関及び産業部門と連携し」と加えていただいてもよろしいか。

県内高等教育機関の国際教養大、県立大、秋大の事務局にメールをしていただいて、どういったリカレント教育をやっているかの情報収集をしていただくのがよいと思う。ちょっと仕事を増やす感じになるがいかがか。

●浅野高等教育支援室長

情報収集に関しては、過去2回の部会でも御意見としてあり、当室としても必要だと思っている。

◎豊田部会長

では、「県内高等教育機関及び産業部門と連携し」と修正させていただきたい。

◎豊田部会長

ここまでで修正を決めたのは、提言 5 の県内高等教育機関からも情報収集するという点と、提言 2 のところで探究型授業について「更なる改善」ではなく、「新たな探究型授業」にするということで、そこに「児童の主体性を中心とした」や「児童を主体とした」といった文言を加える。また、提言の背景に、「レジリエンス」や「コロナ禍の経験を踏まえ、教育の本質が児童の自らの学ぶ力の習得にあることを改めて確認した」などの文言を入れる。

修正については以上であるが、最終構成については、事務局と部会長に御一任いただくということでよろしいか。

(異議なし)

◎豊田部会長

それでは部会長専決事項とさせていただく。もちろん今後、項目を追加するとか、追記・削除するというような大きな変更がある場合には、随時御報告させていただきたい。

### (3) その他

◎豊田部会長

最後に、議事(3)その他について、事務局から何かあるか。

●教育庁総務課 伊藤副主幹

特にないが、本日野崎委員が御欠席になっているので、本日の内容も含めて御報告させていただいて、野崎委員からも御意見をいただいた上で、最終的な提言書を仕上げたいと思っているので、よろしく願います。

◎豊田部会長

本日は提言書の内容を確認して議論するということがあったので、それほど時間もかからず進めることができた。時間がまだあるが、第3回の審議はここまでにした。

それでは進行役を事務局にお返しする。

●教育庁総務課 古井政策監

最後に事務局を代表し、教育次長の和田より一言あいさつを申し上げる。

●和田教育次長

今年度、これまで3回にわたって限られた時間の中であったが、有意義な意見交換をしていただき、御礼申し上げます。部会長の豊田委員をはじめ、佐藤委員、廣田委員、そして本

日御欠席であるが、野崎委員の4名の方々には、貴重な御意見、御提言をいただき、改めて感謝を申し上げます。

さて、私であるが、秋田県の教員になったのは37～38年前。その時の子どもたちはとても恥ずかしがり屋で、多くの人を前に話すのがとても苦手であった。校外学習で見学をしても、誰一人質問しないという場面もあって、困ったなと思ったことが思い出の一つである。

しかしながら今はどうだろうか。本県は、平成23年度から「問いを発する子どもの育成」を掲げている。人の話をしっかり聞いて、疑問に思ったことを堂々と質問するようになってきたと思っている。

子どもたち相互の対話もそうであるが、その対話の相手は、教師・学校の先生、自分自身、そして先哲や資料など多岐に渡って、子どもたちの多様な対話の形式に柔軟に対応できていると思っている。さらには、共感、納得、深掘りと、深い学びへと発展してきている。「問いを発する」という行為の捉え方、質が変化してきたと思っている。

こうしてみると、人づくり・教育のあり方は、変化の激しい時代に対応していかなければならない面があり、こうしたことを踏まえて御提言をいただいたことに心から感謝申し上げます。

今回、特に英語教育について貴重な御提言もいただいた。県教育委員会では、県内の高校生を対象とした即興型ディベート大会、また小学校3年生から高校3年生を対象としたイングリッシュキャンプを開催している。こうした取組を通して自分の考えや気持ちを英語で発信する力がついてきていると思っている。

今、インターネットで英語と接しようと思えば幾らでも機会はあると思うが、私どもの目指すところは、できるだけ子どもたちには、バーチャルではなくて、五感を使って触れて欲しいと思っている。

背景が分からないと聞くことができないし、聞き取れないと、次の言葉を出すこともできない。言葉を学ぶときは、その背後にある諸々のことを一緒に学ぶ必要があると思っている。そのためには、県教育委員会として、ALTと直接接する機会をつくって、聞いたり話したりというイングリッシュキャンプ、それから手紙をやりとりするというファンライティング、そういった事業をこれからも更に充実してまいりたい。

それからあともう一つはICT、こちらについてもたくさん御提案いただいた。令和3年度から、小・中・高校にタブレット端末が整備された。御指摘のとおり取組は遅れていたことは確かであるが、この3年で急速にキャッチアップして、ICTを使った授業が、展開されている。効果的という点では、まだまだ課題があると思っているが、タブレットに何を書かせるか、どんな時に電子黒板を活用するか、通常の黒板に何を書くのか、そういったことを現場では試行錯誤していると聞いている。

3年前、私は、事務所の所長として、およそ60校の学校を訪問した。授業参観をした時に、秋田の先生方の、特に小学校の先生方の板書に魅了された。1時間の学びが板書にしっかりと構造化され、秋田で自慢する家庭学習ノートのモデルになったのではないかと思っ

ている。

ICTの効果的な活用と、それから美しい板書、これをいかに融合させるか。ICTの活用と、これまでの授業をベストミックスする、先ほどもお話が出たが、まさに新たな秋田の探究型授業を今後とも目指してまいりたい。

最後になるが、委員の皆様からいただいた提言を来年度の事業立案に生かしてまいりたい。これまでの御審議に改めて感謝申し上げます。

### **3 閉会**

(以上)